

工でやり、十一年目に完成させた。とび職を辞め、建築設計事務所を始めた長兄が褒めた。「仕事は分かれればできるさ」「これで我が戦後は復興したのだ」「生意気言うな」。平成十一（一九九九年）桜花に送られ六十六歳で定年退職。この間に母と長兄は病没した。長姉正子は、終戦時京城（ソウル）で病氣入院中に死亡。私は雄基（現在の先鋒市）と終戦前後の出来事及び引揚げを忘れない。

## 北朝鮮脱出の記

東京都 佐藤 美子

### 一 阿吾地での新婚生活

朝鮮咸鏡北道慶興郡阿吾地邑灰岩洞五十番地。これは昭和二十（一九四五）年八月十日までの、朝鮮人造石油株式会社阿吾地工場の所在地であり、そして私たち一家が平和な毎日の生活を営ん

でいた所でもあります。会社では良質の石炭を液化して石油を造っていたようです。阿吾地は、朝鮮、満州、ソ連の三つの国境が近くにあり、京城（ソウル）から二十四時間もかかる山また山の僻地にある酷寒の地です。

京城生まれ京城育ちの私が、阿吾地の佐藤仁の許へ嫁いだのは、昭和十八年三月下旬でした。佐藤が住んでいた社宅は煉瓦造りの二階建て、一棟六軒の長屋風で、広い敷地に同じ造りの建家が何列も整然と並んでいました。北朝鮮の春は遅く、社宅にはまだスチームが通っていて、建家の間にあるスチームのドレンパイプから白い湯煙がもうもうと上がっていた風景が印象的で、私には湯の里というような思い出がありました。

しばらくして映画館近くの一戸建てに移りました。今度の社宅は設備が良く、どの部屋にもスチーム暖房が通っていて、真冬でも浴衣一枚で過ごせるほど温かく、台所はすべて電化され、栓をひねれば熱い湯が出るのはお風呂も同じでした。

お米をはじめすべてが配給という統制時代に、京城でもあれほど設備が整った家はなかったと思います。春遅い北朝鮮の山野も、五月ごろになると木々は芽吹き、レンギョウやツツジ、スズランなどなど一斉に咲き出して、それはそれはきれいでした。

昭和十九年十一月には長女光子が生まれました。二十年のお正月には京城から父や妹が来てくれて、初孫を抱いた父の嬉しそうな顔は忘れられません。今から考えると、それが父と光子との別れでした。そして私と父とも……。(母は既に昭和十七年六月に四十五歳で亡くなっていました)当時天長節だった四月二十九日、主人はリュックサックいっぱいのお書類を持って本社へ出張しました。七月に入り「もうすぐ帰る」と連絡があり、帰りを待ちわびているうちに、あの八月十日を迎えました。

## 二 逃避行

「暴動が起こりそうだから二、三日山の中に避

難するようには」と会社からの命令がありました。十日の早朝、私は大事な衣類などは防空壕にしまひ、九カ月の光子を背負って毛布、着替え、オムツ、ミルク、砂糖のほか二、三日分の食糧だけを持って、班の方たちと共に社宅をあとにしました。これが長い長い逃避行の始まりになるうとは、当時思いもよらぬことでした。皆が社宅を出たあとには、朝鮮の人たちが牛車を引いて略奪に來たようです。

初めはまとまって歩いていたらたちも、足の速い人はどんどん先へ行き、子連れや足の遅い人たちはだんだんと遅れがちになり、いつしかバラバラになってしまいました。どこにも泊まる所がなく、毎日野宿するしかほかに方法のないまま、光子と二人で毛布にくるまって寝ました。この毛布は、義父が私たちの結婚祝いにくださった二枚統きのとても良い物でしたが、朝になると夜露に濡れてずっしりと重くなり、荷になるので半分は切って、毛布の無い人にあげてしまいました。

○乳のみ児の吾子を背負いて幾日ぞ

野宿を重ねる果てしなき旅

○避難の日々歩み疲れし母と子の

仮寝の夢は干し草の宿

(干し草っていうものは、お陽様の匂いがしてとても暖かく、よく眠れました)

○炎天下に南を指して歩めども

行けども行けども汽車の便なし

「会寧まで行けば汽車が出る」という噂を頼りに歩き続けました。やっとたどり着いた会寧では、駅舎が燃えていました。「今朝最後の汽車が出て、その後日本軍が駅舎に火を付けた」ということでした。その煙にむせんでいると、「ソ連兵が来るぞ」という声が聞こえてきました。私たちはそんな噂におびえながら、またまた興南を目指して歩くしかありませんでした。

敗戦を知ったのは茂山近くの山道を歩いているときでした。丸腰の兵隊さんが、「日本は負けた。奥さんたち元気で帰んなさいよ」と声を掛けてく

れました。行く先々の小さな村では、日の丸によく似た朝鮮の旗が掲げられていました。歩き出した一日目は、二十八キロメートルくらい歩いたようでしたが、日ごとに疲れは募り、ろくに食べるものもなく、お腹を空かせて泣く光子がかわいそうでした。泣き声に私まで悲しくなり涙をぼろぼろ流しながら歩きました。見かねたオモニがお乳を飲ませてくれたこともありました。行く先々で、朝鮮の人から「赤ちゃんをくれ」と言われましたが、どんなことがあってもこの子を京城の父の所まで連れて行こうと決心していました。少しでも早く南へ行かなければと、気はせくのには体はいうことをきかず、光子にゆっくりお乳を飲ませる暇もありませんでした。

お腹が空いているはずなのに、おんぶされて安心しているのかおとなしくしているのがかわいそうでした。今考えれば、日に日に泣く元気も無くなっていたのでしょう。家を出るとき鍋を持ち出さなかった私は、歩いている途中拾った鉄かぶと

を鍋代わりにしました。農家でジャガイモを分けてもらい、河原で茹でました。これが貴重な一日分の食糧になりました。ジャガイモなら、噛み潰して光子にも食べさせることができました。あるご夫婦は長い木の枝を物干し竿代わりにして、洗ったおしめを乾かしながら歩いていました。

茂山駅を通ったときに、ここから白岩まで汽車が通っていることを知りました。私の足も限界でした。折良く貨車が停まっっていて、貨車の中は満員でしたが、屋根には丸太が滑り止めに固定してありました。何とかしてこれに乗りたい一心で、子供をおんぶしたまま屋根によじ登ろうとしてみると、運良く屋根に乗っている人が私を引っ張り上げてくれました。天の助けとはこのことでしょーう！ 夢中で丸太棒にしがみついています。ほっとしてよく見ると、どの貨車の屋根にも避難民がしがみついています。まもなく満員列車が発車しました。滑り落ちたらそれこそ大変！ 必死で丸太棒にしがみつき直しました。列車は山道

をあえぎながらゆっくり走って、やがてトンネルに差し掛かりました。私たちの貨車がトンネルに入った途端にギーッとストップしてしまいました。熱い煙が身体全体を覆って、その息苦しいこと！ 煙にむせていると、機関士や助手たちがトンネルを飛び出して、山の枯れ枝などを集め運び込み始めました。燃料切れだったらしく、しばらくしてゴットンゴットン動き出しました。トンネルの中の暑かったこと！ 親子共々煤煙で真っ黒になっていたと思います。よく蒸し殺されなかつたと、あとで思い出してはぞつとしました。

白茂線は北朝鮮の高地を走っている汽車と聞いていましたから、貨車の屋根に乗っての苦しい旅でしたが、歩いての旅とは比較するまでもありませんでした。ただ、列車の不通になっている区間は歩かなければなりません。トンネルの中は真っ暗なので、杖でレールを叩きながら歩きました。

○北鮮の山から山へ避難せし

杓くちき日のこと夢のごとくに

三 興南での避難生活で光子を亡くす

九月の末ごろ、やっとの思いで本宮にたどり着きました。本宮のわだつみ寮へ入ってほっとしたのも束の間、内地人住宅と朝鮮人住宅の入れ替えで、私たち避難民も徳里の徳和寮へ移されました。朝鮮人の独身寮のようでした。温突オンドルが入った六畳一間に、庶務の小池ご夫妻と赤ちゃんと妹さん、製造部の稲葉ご夫妻と赤ちゃん、私と光子、蔦谷さんの大人七人と赤ちゃん三人が入りました。赤ちゃんは、三人とも生後九カ月くらいでした。どの部屋もぎゅうぎゅう詰めの状態でした。秋の収穫時で、光子をおんぶして朝鮮人の農家へ通いました。町育ちの私は、収穫の手伝いは初めてでしたが、二人で生きていくためには頑張らなければなりません。高粱や粟の穂きり、朝鮮漬けの手伝いなどなど。子供を背負って頑張っているときどき休ませてくれました。そして昼ご飯にはサ

バリ（どんぶり）いっぱいジャガイモの漬した中に、ウズラ豆の入った食事と朝鮮漬け、お汁を出してくれました。あまり多くて食べきれなかった残りは、カボチャの葉に包んで持ち帰らせてくれました。ときにはダイコンや野菜もくれました。母と子が何とか飢えないで生きられました。夜になると保安隊がソ連兵を案内して来るので、うかうか寝てもいられません。見張りの人から合図があると、朝鮮家屋の高い小さな窓から外にくぐり抜けて、冷たい秋風に身を縮めて煙突の陰に隠れるのでした。火の気のない温突は冷え込むので、小池さん、稲葉さんのご主人が農家からもらって来たわらを布団にして、部屋いっばいに敷き込みました。

北朝鮮の秋は短く、収穫の手伝いもなくなってきました。市場で葉たばこを仕入れて寮で売り歩きましたが、結構売れてほっとしました。寒い冬が訪れましたが、温突の火が通っていない寒い部屋で大人七人、乳児三人が生活する相変わらずの

毎日、お互い美味しい食べ物の話ばかりしながら、いつ日本に帰れるのか当てもない不安な毎日を過ごしていました。

避難民の間に発疹チフスが蔓延しました。十一月末には私もかかってしまつて高熱が続ぎ、知らぬ間に隔離されました。光子がどうなったか聞きたいのですが、周りは知らない人ばかりでどうすることもできませんでした。一日一回カップ一杯のお粥と、ダイコンおろしの食事で、診察もされず薬もくれず、ただ寝かされているだけでした。十二月に入って熱も下がり、十二日には退院の許可が出て、ふらつく足で道を探ね尋ね、寮まで帰って来ました。外で遊んでいた子供たちが「あつ、おばさんが帰って来た。おばさん、赤ちゃんが死んだよ！」と大きな声で教えてくれました。十二月八日に、光子は亡くなっていました。同室の方々のお世話になったようです。光子は、冬の凍てついた三角山に埋められたそうです。両親にも看取られず死んでしまうとは、光子

は戦争のかわいそうな犠牲者でした。母の力すらなかったことを、ただただ詫びるばかりでした。

○凍てつきし異国の土となりぬらむ

幼な児逝きて五十余年たちぬ

敗戦後、避難民として迎えた昭和二十一年の新年のわびしかったこと。阿吾地出発以来、かたときも離さず護り続けてきた当時一年一カ月の長女を、私が隔離されている間に亡くしたことは、私の心の中にぽっかりと大きな穴があいたような、何とも知れない空しさでした。敗戦後の内地はどうなっているのかしら、主人は、祖父や父は、姉弟は、と次から次へと不安は募るばかりでした。避難中の日本人からたくさんの犠牲者が出るので、ソ連は一日四合、お米の配給を始めました。私たちはその中から少し市場に持って行き、塩やジャガイモやキムチなどと交換しました。お米を配給されても白いご飯は食べられませんでした。いつ配給がストップになるか分かりませんでした

ので、ダイコンやダイコン葉などたくさん入れてトロトロのお粥にして食べ、お米は節約しました。少し遠いのですが、西湖津まで歩いてワカメを採りに行きました。米粒の少ない雑草入り雑炊の中にこのワカメを入れると、さつと鮮やかな緑色になり、磯の香りがして故郷の伊豆を思い出しました。この雑炊の美味しかったこと！ 忘れられません。秋の収穫時にお世話になった農家に行ってお礼に初めて砵を打ちました。

○砵打つ手に力なく軽き音する

オモニに、もっと力を入れて叩けと言われてましたが、そのころの私の腕は今の手首の太さくらいしかありませんでした。今の私からは想像もできません。

病後間もないころ、ふらつく身体で豆かす運びの使役に駆り出され、偶然にも小学校以来仲良しの貞永さん（ご主人は日窒鉱業勤務でした）に、ぱったりと出会いました。京城の新堂町社宅に住んでいらっしやるとばかり思っていましたのに、

端川の山奥の釜洞鉱業所から避難して来られた由、上下そろいのモンペ姿がとてもきれいでした。お互い使役中ではゆっくり話もできず、とりあえず住所だけ聞いて別れ、翌日遠い雲中里の社宅まで訪ねて、お互いの避難話に時の経つのも忘れていました。そして塩サンマ入りのお粥をご馳走になりましたが、とても美味しかったことが忘れられません。そして天機里市場の朝鮮そば（一円）の美味しかったことも！ 苦しかった興南での生活の中で忘れられない思い出の数々です。

厳しい冬ごもりから解放されて、野草も芽吹き、北朝鮮にもやつと春の気配が感じられるころ、避難民の国内移動が始まりました。中国人の農家へ手伝いに行っている所へ迎えが来て、移動のことを伝えてくれました。おんぶする幼児もなく、着た切り雀の状態ですから、移動と言われている簡単なものです。

四 富坪での避難生活

興南から貨物列車で少し南下し、着いた所は富

坪という元陸軍の演習場で、その兵舎に入れられました。兵舎には威興からの避難民があふれていました。徳和寮よりも、ずっとずっと悲惨な所でした。あとから聞いた話では、威興からの避難民がたくさん入れられていましたが、多くの人たちもが厳しい冬の寒さと栄養失調のために、身体が衰弱して凍死されたそうです。ひと目見ただけで、何かしら不気味さを感じる所でした。少しでも元気のある人たちは、毎日のように南に向かって歩き出して行くようでした。

鉄道掃除の使役に行ったときには、停まった列車の窓からロシア人のマダムが顔をのぞかせたので、「パン、ダワイ」と言ったら、黒パンをたくさんくれました。ほかにも女の兵隊さんが大勢いて、あちらでもこちらでも黒パンをくれました。あまり多いので、スカーフを風呂敷代わりにいっぱい包んで兵舎に持って帰り、みんなに分けてあげました。初めて食べる黒パンは少しボンボンしていました。避難民にとっては思いがけない天

の恵みでした！ 今でも列車の窓で見たマダムや女性兵士に感謝しています。

興南では近くの農家へ手伝いに行けるほど自由だったのに、富坪では周りに鉄条網が張ってあって、部落へ出られません。病舎の手伝いをするこゝとになりました。兵舎から大分離れた山の中に病舎があり、板の間には筵むしろを敷いて、骨と皮だけのように痩せこけた人たちがゴロゴロと寝かされていました。私が病気になったときと同じように、診察もなく薬も食事も与えられていませんでした。夏になるとハエがうるさく飛び交い、払うこともできない病人の目元に卵を産み付けると、卵はすぐにウジとなり、ごもごもと動き出していました。木の枝で作った箸でウジを取って次の人に取りかかるところ、もうさっきの人の目にハエがたかっている始末でした。そして、次から次と亡くなっていきました。誰一人肉親に看取られることもなく、淋しく異国の土とられた方たちのご冥福をお祈りするばかりでした。

ある日、中野所長が「興南から病人を視察に来られるので、お迎えに出るように」と言われたので、病舎の入り口に並んでお待ちしていました。そのご一行の中のお一人を「どこかでお会いしたことのある方だ」と思っていましたら、その方から声を掛けられました。鴨緑江水電の文書にいらした、小城戸さんでした。保健部長として視察に来られたようでした。私は見る影もない哀れな姿で恥ずかしい思いでしたが、「元氣を出して、頑張ってください」と励ましの言葉を戴きました。本当に思いがけない出会いでした。

興南の使役で貞永さんとぼったり出会ったこと、そしてまた人里離れたこの富里の病院で小城戸さんとお会いして、世の中には思い掛けない出会いがあるものだと思います。いつ日本に帰れるか分からない不安なときに、京城にゆかりの方に偶然巡り会い励まされたことは、本当に嬉しく心の支えになりました。このことは一生忘れることはありません。

しばらくして、病人は興南へ引き取られて行きました。それと入れ替えのように、威興からソ連が飼っている牛が送られてきました。「収容所の全員で牛の番をせよ」とのことでした。子供たちも一緒に、朝早くから手に棒を持って牛を追い、高原で牛を放し、夕暮れにはまた牛を連れて兵舎へ帰って来ました。毎日、草原で牛の番をしながら空行く雲を眺めて、いつになったら日本へ帰れるのかと考えていました。そのころには、兵舎で何日かおきにお風呂に入れるようになりまして、お米の一日四合の配給も順調に続き、ソ連兵が牛を屠殺とぎうしたときには、私たちにも一キログラムずつ配給されました。みんなどう食べようと大騒ぎでした。

富坪の収容所にも大分慣れてきて、ときどき近くの朝鮮人の部落に物々交換に行くようになりましたが、幸いなことにどの家にも優しいオモニがいました。言葉は通じませんでしたが、身振り手振りでも何とか話が通じました。ある一軒の家に

行ったとき、奥の部屋に日本女性がいました。その人は名前を秀子とっていました。色の白い典型的な東北美人でした。「日本へ帰っても誰もいないから」と、淋しそうに身の上話をしてくれました。「部落へ来たときにはぜひ寄ってほしい」と言われましたので、それからは度々話をしに行きました。あるときその家の主あひいに出会いました。

全身白い包帯に包まれていましたので、らい患者ではないかと思いました。お辞儀もそこそこ察へ帰って来ましたが、それからしばらくはその家から遠ざかっていました。でも秀子さんのことを思うとかわいそうで、ついでのときに寄ってみました。秀子さんは喜んでくれましたが「佐藤さんは、いつかは日本へ帰るのでしょうか？ 帰るときは必ず教えてね」と何度も念を押されました。

#### 五 富坪脱出、三十八度線を越える

短い夏が過ぎ、高原の秋は駆け足でやってきました。北朝鮮で二度目の冬を迎えることになっては、とても助からないとみんな思っていました。

朝鮮では中秋名月の晩、酒盛りが催されます。多分保安隊の監視もゆるむだろうと見込んで、その機に脱出することになりました。中野所長以下七十二人が三班に分かれて、夜中一時に足の弱い子供たちが多い第一班が、五分遅れで二班、その後三班という具合に脱出を始めました。

私と附属病院で産婆さんをしていた橋口さん、製造部に勤務していた浅沼康子さんの三人は、三班に入りました。折からの満月に脱出の成功を願い、ときには自分の影におびえながら、本当に必死の思いで収容所を脱出しました。七十二人が南を目指して夜通し歩き続けました。

○ふるさとの肉親照らす満月を

頼りに我は脱出を成す

野越え山越えして、やっとの思いで三十八度線目前の漣川までたどり着きましたが、この保安隊長は「日本人にはひどい目に遭わされた。お前たちはもとの所まで帰してやる」と貨車に乗せられ、何日もかかって歩いてきた道を、無情にも逆

戻りさせられることになりました。リーダーの中野さんが鉄道関係の方だったようで、鉄原まで戻った所で貨車が長い間停車しているときに、「今のうちに降りて歩きましょう」と言われ、全員貨車から降りて漣川の西、開城の方向に歩き出しました。

高浪浦近くの保安隊にたどり着いたときには、全員くたくたでした。漣川のとこのように追いつかれたらどうしようかとの思いが先に立ちました。この隊長は東京で勉強されたことがあるそうで、「日本の人たちには、いろいろ親切にしてもらいました。もうすぐ交替兵が三十八度境界線に行くから、それについて行くように」と言われました。地獄に仏とはこのことでしょう！ 足の弱い女、子供の多い一行でしたが、皆必死でついて行きました。やがて、狭い田舎道に丸太棒を横に渡して、道路閉鎖している所に着きました。

そこが朝鮮を北と南に区切る三十八度線でした！ 皆夢中でそこを走り抜けました。星条旗は

ためく米軍管理地区にたどり着いたときの喜び！これは例えようもありませんでした。男も女も子供も年寄りも、みんな抱き合って泣いていました。骨と皮だけの痩せこけた身体、断髪、日焼けと汗とほこりで真っ黒な顔が、涙でくしゃくしゃになっていました。そして、ここから米軍のトラックで開城まで運ばれ、貨車で釜山へと向かいました。

○中空にかがやく月を仰ぎつつ

北鮮脱出は遠き日のこと

毎年、秋の満月には「お月様、あときは有り難うございました」と心からお礼を言います。そして、富坪の秀子さんに「出発する連絡もできず、黙ってさよならしてしまっただけで御免なさい」と、あのとこと同じ月に向かって手を合わせています。日本人が皆脱出してしまったあの富坪の地で、どんな生涯を送られたのでしょうか、心に残る方でした。

釜山から貨物船「朝輝丸」の船底の一室に乗っ

て、玄界灘の荒海を一路博多へと向かいました。

## 六 博多に上陸、帰郷

無事博多に着いたのですが、伝染病を持ち込んではいけないというので、すぐには上陸させてもらえず、そのまま船の中で十日間の検疫期間を過ぎました。その間、毎日茶碗一杯の薄いお粥が支給されただけでした。船底から甲板への階段もやつのことで上るほど体力が落ちてしまっていました。甲板から博多港の灯りを見て、あと幾日かで日本の土を踏めるのだと実感しました。暗くなれば電灯がつくのが当たり前だと思っていましたが、避難民になってからは暗闇の中で野宿を続け、興南の徳和寮に入ったときも、要所要所に裸電球がぶら下がっているだけでしたし、富坪では全く電灯無しの生活でした。博多の灯を見て、無性に懐かしく有り難くなりました。明るい電気は有り難いです。

良いあんばいに伝染病患者も出ず、上陸を許可されて大濠公園の収容所に入りました。富坪脱出

以来、苦難を共にした友、浅沼さんは熊本へ、橋口さんは鹿児島へ、私は静岡へとそれぞれの故郷に向かうことになりました。各地に向かう列車はどれも超満員で、皆窓から降りしてしましました。私たちもやつのことで乗り込みましたが、身動きもできない状態で大変でした。夜中に沼津駅に到着しました。東海汽船の出る港まで夜道をとぼとぼ歩きましたが、もうここは日本の国土です。北朝鮮の野山をさまようとは違って、一歩に力が入りました。

薄暗い港で夜明けを待って、一番船に乗り込みました。船は早朝の波静かな海を進み、戸田港、土肥港を経て二時間後、故郷、西伊豆八木沢へ帰り着きました。懐かしい故郷の山野、そして浜辺の家々が見え始めると、何とはなしに涙があふれてきました。海岸続きの裏木戸から家に入ると、庭先にはサツマイモがたくさん転がっていて、何とはなしにほっとした気分になりました。物音に気付いて出て来た妹の富子と、抱き合って泣いて

しまいました。

## 七 家族帰郷の状況

八木沢の実家では、昭和十八年秋に祖父熊太郎と妹の富士子が、京城から帰郷しました。昭和二十年には、父と弟も京城から八木沢に帰郷してまいりました。父は、私と光子が京城に着くのを毎日待ちわびていたようですが、医専生で海軍軍医委託生だった弟萬夫の介護も及ばず、眼底出血のために、十一月初め八木沢の家に着く直前、沼津駅で目が見えなくなってしまうようです。それでも弟は、父を家に置いたらわたしたちを探しに朝鮮に渡るつもりだったようですが、当時の状況ではとても無理なことでした。そして父は、家に帰り着いて二週間経った十一月二十八日に、消息の分からない私のことを案じながら亡くなりました。考えてみると、私が発疹チフスで倒れた、ちょうどそのころでした。私は父が「美子が大変だから」と、孫の光子を連れて行ったのだと信じています。ご仏前で、「お父さんお母さんが護ってく

れたお陰で生きて帰れました」と涙ながらに報告いたしました。

案じていた主人は、山口県徳山市の爆撃で破壊された第三海軍燃料廠跡に窒素肥料工場を建設する工事に従事しており、翌日は徳山から主人が駆けつけてくれました。久しぶりの再会！ 万感こもごもでした。雄基への連絡船が出ていた新潟港にも行ったそうですが、当時は魚雷攻撃を受けるというので船も出なかったらしく、私共の消息は何一つ分からず、とても心配したそうです。

弟は結婚して土肥町の京王堂病院へ勤務していました。

私が帰ったので、早速妹や弟の嫁、よりゑさんがお風呂を沸かしてくれて、長い旅の汚れを洗い落とししましたが、何をしても何を話すのも涙、涙でした。

家族の暖かいいたわりを受けて、久しぶりに柔らかな布団に休ませてもらいましたが、苦難の中で逝ってしまった光子のことを思い出したり、引

揚げ中の様々なことが頭の中に浮かんでは消えしているうちに、いつしか眠ってしまいました。翌朝障子から差し込む日射しで目覚めました。これは夢ではないかと何度も頬をつねってみました。私は、夫が勤める徳山の工場の社宅ができて翌年の春まで、伊豆の実家で心身の疲れを癒すことになりました。

## 八 徳山での生活

昭和二十二年の春、山口県徳山市丸山町の新しい社宅に入りました。裸一貫の引揚者ですから、大きな荷物など何もなく、ちゃぶ台なども引越に使った段ボール箱を使いました。庭は家庭菜園にして、ダイコンの種を蒔いたりサツマイモの苗を植えたりしました。砂地でしたから、秋にはサツマイモがたくさんとれて大阪守口市に住む姑の所にも送り、義弟妹にも喜ばれました。当時は主食も魚も配給でしたが、それも遅れがちでした。でも避難中の生活に比べると有り難いことでした。夏になると、旧海軍の官舎近くの川べりにはたく

さんの蛍が飛び交いました。私は、初めて見る蛍の淡い光がとても幻想的に見え、戦争で亡くなった多くの方々の魂が帰って来られたような神秘的なものを感じました。私は点滅する淡い光を、いつまでも飽きずに見つめていました。

## 九 東京・雪谷での生活

徳山の生活も短期間で、昭和二十三年には東京本社へ転勤になりましたが、当時東京への転入は食糧事情の関係で制限がありましたので、しばらくは主人が単身で赴任することになりました。私は、春になって世田谷区若林にある入江さんの離れに入れて頂くことになりました。入江さんは興南から引き揚げられた方で、ご家族はご夫妻と三歳になるお子さんの千賀子ちゃん、大阪から移られたおばあちゃんの四人家族です。よく三軒茶屋の闇市へ一緒に買い出しに行きました。毎日賑やかに楽しく過ごさせて頂きましたが、大田区の雪谷に社宅ができて上がったので、そこへ移りました。社宅は十六軒くらいの一戸建てで、入居し

たのはほとんどが引揚者でした。そのころはお米の代わりにザラメがたくさん配給されました。それを蒲田の闇市へ持って行きお米と交換し、ついでにふかしイモを買って帰りました。昭和二十三年十月には長男が生まれました。色の白いかわいい坊やで、主人が裕ゆたかと命名しました。幸いにも、お乳がたくさん出てたっぶり飲むせいか、あまり泣かない良い子でした。

#### 十 水俣での生活

昭和二十四年春には、熊本県水俣市の工場へ転勤となりました。ちょうど市制祝賀のお祭りで賑わっていました。サクラの花の下にはたくさんのお店が並び、戦後の復興を感じました。社宅近くの八幡神社境内に土俵が作られて相撲が行われましたが、これは恒例の行事のようで、対岸の天草からもアマチュアの相撲取りや応援の人たちが船を利用して参加していたようです。秋には係對抗のせり舟大会があり、水俣川べりでは応援の大歓声が上がりました。

昭和二十五年十月には、次女が生まれて節子と命名しました。お産婆さんが間に合わないくらい早く生まれてきた、元気の良い女の子でした。光子の生まれ変わりかも知れません。二人の幼な子を抱えて毎日忙しい明け暮れでしたが、面倒見の良いご近所の方々のお陰で子供たちも病気ひとつせず、すくすくと育ちました。水俣でも社宅が足りなくなつて、私たちは三本松社宅から八幡社宅へ移りました。昭和二十七年八月には次男が誕生、司と名付けました。庭には家庭菜園を作り鶏も飼いましたので、野菜も卵も新鮮なものを食べられるようになりました。このころ社宅の建設が盛んになって、八幡住宅よりずっと海岸寄りに第二アパートができて移り、しばらくしてまた第四アパートへ移りました。水光社への買い物があるんだん遠くなるので、自転車に乗る必要に迫られました。毎朝夕方に練習をして、やがて乗れるようになりました。節子が幼稚園に行くようになると、日曜日にはお握りの弁当や果物を持って同じ

アパートのお兄ちゃんも誘い、司はお父さんの自転車に乗せ、親子そろってサイクリングを楽しみました。湯の児へ行く海岸道路をサイクリングしながら、途中海岸へ下りてお弁当を食べ、そのあとは貝拾いをしたり水遊びをしたりして楽しく過ごしました。山や海に近く、美しい自然に恵まれた所でのびのびと子育てができた幸せに感謝しております。水俣市の中心地には文豪徳富蘇峰、蘆花ご兄弟の生家があり、その辺りは静かなたたずまいでした。

水俣の生活にもすっかり慣れて、いつの間にか十年の月日が流れました。ちょうどそのころ、「海岸近くの猫が踊り狂っている。おかしい」という話を近所の人から聞きました。昭和三十四年に、主人が東京本社へ転勤になりました。東京へ来てから、水俣病という奇病のニュースを聞いて驚きました。風光明媚な自然と人情の豊かな所でしたのに、公害で有名になったのは残念なことです。

## 十一 杉並での生活

杉並区成宗の借り上げ社宅は近くに杉並高校があり、通学する高校生で賑やかでした。大通りに出るとそこは青梅街道で、杉並区役所や郵便局や警察署があり、新宿行きの路面電車が走っていました。区役所の近くには阿佐ヶ谷の商店街があり、毎日そこへ買い物に出掛けました。

昭和二十三年ごろの東京はすべて配給制で、店先も寂れていましたのに、十年後の東京は見事な復旧ぶりで、どの店も活気にあふれていました。

国鉄の駅前から青梅街道まで、銀行、不二家、呉服店、靴屋、酒屋、玩具店、八百屋など、いろいろな店が軒を連ねていました。また、屋台の焼鳥屋からは串焼きのいい匂いが漂っていて、町はとて賑やかでした。相撲の花籠部屋や二子山部屋が近くにありましたので、日曜日には商店街を歩く相撲取りの卵たちをよく見掛けました。名物の一つに、阿佐ヶ谷の七夕祭りがありました。それぞれの店が工夫を凝らして七夕の飾りを付け、テレ

ビの人気者の人形なども並んでいて、道行く人を喜ばせていました。見事な飾りに気を取られて人に突き当たったり、迷子になったりする子もいました。金魚すくいもありましたので、子供たちにとっては夏休みの楽しみの一つでした。子供たちに通った東田中学校の近くに二子山部屋があって、体格の良い弟子たちが中学校に通学していました。オリンピックがあった年には花田満君（現・二子山親方）が聖火リレーの走者に選ばれて青梅街道を走るのを、中学校のPTAとして声援に出掛けました。当時、花田君は水泳部の花形でした。のちに角界入りして活躍し、名力士大関貴ノ花の名を残されたことに心から拍手を送ります。

主人は昭和三十四年の秋ころには、千葉県原市五井にできる石油化学工場の建設に従事しました。埋立地に新しい工場を建設するという仕事は大変な苦勞だったようですが、反面やりがいもあったようです。

定年退職後はコンサルタンツ会社に勤務して、札幌で開催された冬季オリンピック施設「宮ノ森ジャンプ競技場」の設計を担当しました。このジャンプ場で日本勢が優勝し、日の丸が一番高い位置で輝いたことはとても嬉しいことでした。

## 十二 町田市に定着

勤務が変わりましたので成宗の社宅を出て、町田市の一角に移りました。北朝鮮阿吾地を降り出しに九死に一生を得て引き揚げたあとは、主人と共に徳山工場―東京本社―水俣―東京、そして町田へ根を下ろして三十四年になりました。広い東京のどの辺りに根を下ろそうかと、京王沿線や小田急沿線から狭山の辺りまで土地を探しに行きましたが、自然がいっぱい残っている町田市の一角に、気に入った土地を見付けました。当時空き地には宵待草がいっぱい咲いていましたし、裏山では夜になるとフクロウやウシガエルが鳴いていました。庭には蛇もよくでてきましたし、かわいいツクシンプもたくさん頭をだしました。長男が大

学でこのことを友達に話しましたら「佐藤の家は東京だろう？」と不思議がられたようです。この辺りでは我が家が四軒目でしたから、まだ外灯はなく夜は真っ暗。都会では見られない夜空の星はひときわ輝いて見事でした。賑やかな阿佐ヶ谷から町田の郊外へ引越して来て、娘は淋しくて毎日泣いていたそうです。引越の当日はちょうど「母の日」でしたから、私にとって、またとない最高のプレゼントでした。一生忘れず感謝しております。次男が阿佐ヶ谷で種を蒔いた甘夏が背丈くらいになっていましたので移植しましたが、見事に成長を続けています。次男が大学卒業の年に樹のてっぺんにたった一つ実がなって私たちを喜ばせましたが、以後毎年美味しい実をつけてくれます。

○吾子植えし甘夏の実の色づきて

冬枯れの庭に明るく映ゆる

町田市に来て、いつの間にか二十四年の歳月が流れました。三人の子供たちもそれぞれに良い家

庭を築き、孫は五人になりました。移って来た当時は二階の窓から田園都市線の電車が見えましたし、横浜線を走る蒸気機関車の音が聞こえたり牧歌的な風景でしたが、やがてこの辺りも家が建ち並び、昭和五十四年には横浜線の成瀬駅ができてから、交通は便利になると同時に都市化が急速に進みました。町田市の中心には、三十階建てのマンションができるなど、次々に高層建築物が建ち、広々とした田園の風景は消え、狭苦しくなっています。

### 十三 阿吾地会

年に一度の阿吾地会（戦前灰岩工場に勤務していた引き揚げて来られた方々の会）が開催されています。いつか明治記念館での会合で、避難が始まった日に召集されたという方から「自分は再婚しています。北朝鮮で別れた妻と子は全滅したと人づてに聞いたが、私が見届けた訳ではないし、子供たちだけでもどこかで生きているのではないか」と話されました。このあと別の席の方からも

同じお話を伺って、あの混乱の中でしたから、こういうこともあったに違いないと思いました。お慰めする言葉もありませんでしたが「何かお力になれることがあれば」と申し上げたのを覚えています。この話を伺ったお二人は、もう亡くなられました。

○彼の地にて亡くなりしと聞く妻と子は

いずこにか生きてなきやと語りし人あり

戦争は、罪もない人たちにまで思い掛けない悲劇をもたらすものです。お二人の男性の深刻な表情が、今でも頭にこびりついています。

#### 十四 追想と感謝

阿吾地―興南―富坪―漣川（ここでは逆戻りさせられました）―鉄原―高浪浦。苦難の道でしたが、本当によく歩きました。

○引揚げの苦難の日々をいとおしむ

五十余年の月日流れて

阿吾地から郷里まで、数々の苦しかった避難中の出来事も、得難い体験として話し合える平和な

日々に感謝しております。「日本へ帰りたい」と願いながら、異国の土とられた多くの方々のご冥福を心からお祈り申し上げます。そして中国残留日本人孤児の肉親探しが、既に回を重ねて続けられています。北朝鮮にもたくさんの日本人孤児がいると思います。その孤児たちが一日も早く肉親と会えるようにと願ってやみません。

○幾山河へだてて育ちし孤児なれど

まみえし肉親に 面だち似かよふ

○われもまた引揚げ来し身よ孤児たちの

熱き涙の身にしみて覚ゆ

主人は八十八歳、私は八十二歳になりました。引揚げの思い出も遠い遠い夢の中の出来事のように感じるこのごろです。無事に帰って来られた我が身の幸せを噛みしめると同時に、「日本に帰りたい、帰りたい」と願いながら果たせなかった方々の無念の思いを偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます。

